

# 「昔爲倡家女 今爲蕩子婦」考

——漢代の「倡家」の實態に即して——

矢 田 博 士

## 一 序

昔爲倡家女

昔は倡家の女たり

今爲蕩子婦

今は蕩子の婦たり

蕩子行不歸

蕩子 行きて歸らず

空牀難獨守

空牀 獨り守ること難し

『文選』卷二十九に收める「古詩十九首」其二の末尾四句である。この詩は、家を出たまま歸らぬ夫を獨り寂しく待ち續ける妻、所謂「思婦（思ふ婦）」の悲哀を詠った詩とされる。漢代には、このような「思婦」を主題とした詩（樂府を含む）が數多く作られているが、詩の主人公である女性の身分・職業が具體的に明示されている例は、この詩のほかには

「昔爲倡家女 今爲蕩子婦」考（矢田）

ほとんど見出しがたい。その意味では、「昔は倡家の女たり」と主人公である女性の身分がはっきりと示されている本詩は、漢代の「思婦」を主題とした一群の詩のなかでも、極めて特異な例と言えよう。

さて、冒頭に提示した四句は、いずれも一見平易な句のように感じられるが、實のところ「昔爲倡家女、今爲蕩子婦」の二句の解釋をめぐっては、以下に示す通り、全く相反する二つの説が存在する。

Ⅰ 「昔」、「倡家女」という不幸な境遇にあった女が「今」もなお「蕩子婦」という不幸な境遇にある、という方向で解釋する説。

Ⅱ 「昔」は「倡家女」という比較的恵まれた境遇にあったが、「今」では「蕩子婦」という不幸な境遇にある、

という方向で解釋する說。

つまり、主人公の女性が「倡家女」であつた「昔」を、不幸な時期であつたと捉えるか、それとも比較的恵まれた時期であつたと捉えるか、という點で、説が大きく分かれているのである。

では、そもそも「倡家女」とは、漢代においていかなる存在であつたのだろうか。この點を明らかにすることは、以上の二説の適否を考えるうえで、決して避けて通ることのできない重要な問題であると思われる。

因みに、日本で刊行されている注釋書の多くは、「倡家」を遊女屋、お茶屋の類の場所とし、「倡家女」をそのような場所で歌舞などにより人を楽しませる遊女のような存在と解釋している。そして、Ⅰ説を取るものは、それを男との離別の悲しみを味わいがちな不幸な存在として捉え、Ⅱ説を取るものは、それを歡樂な生活に慣れた華美な存在として捉えている。しかし、これまでの「倡家」に對する解釋は、必ずしも漢代の「倡家」の實態に即したものだと言いがたい。

そこで本稿では、漢代における「倡家」がいかなる存在であつたのか、その實態を文獻資料に基づき、可能な限りにおいて調査し、そのうえで改めて「昔爲倡家女、今爲蕩子婦」

の解釋について考え直してみることにする。

## 二 異説の所在

まず初めに、本詩全體の内容を確認し、問題の二句の解釋について、諸説を整理することにする。

- |         |             |
|---------|-------------|
| ① 青青河畔草 | 青青たる河畔の草    |
| ② 鬱鬱園中柳 | 鬱鬱たる園中の柳    |
| ③ 盈盈樓上女 | 盈盈たる樓上の女    |
| ④ 皎皎當窗牖 | 皎皎として窗牖に當たる |
| ⑤ 娥娥紅粉粧 | 娥娥たる紅粉の粧    |
| ⑥ 纖纖出素手 | 纖纖として素手を出だす |
| ⑦ 昔爲倡家女 | 昔は倡家の女たり    |
| ⑧ 今爲蕩子婦 | 今は蕩子の婦たり    |
| ⑨ 蕩子行不歸 | 蕩子 行きて歸らず   |
| ⑩ 空牀難獨守 | 空牀 獨り守ること難し |

本詩は、末尾四句からも明らかなように、家を出たまま歸らぬ夫を獨り寂しく待ち續ける女性の悲哀を詠う。

- ①②は、女性の住む樓上から眺められる實景であらう。①

は樂府古辭「飲馬長城窟行」の冒頭二句「青青河邊草、慙慙思遠道」を踏まえるならば、あるいは遠道にいる夫に對する女性の思いを暗に示しているかもしれない。同様に、②の「鬱鬱」についても、「園中柳」のうっそうと茂るさまを形容すると同時に、女性の心情をも表していると考えられよう。

③から⑥では、樓閣の窓から外を眺め、夫の歸りを待ちわびる女性の姿が微細に繪畫的に描かれる。「盈盈」はそのみずみずしさを、「皎皎」はおそらくはその白く輝く顔を、「娥娥」は紅や白粉で化粧を施した美貌を、「纖纖」はほっそりとした白い手を、それぞれ形容しており、とりわけ女性の美しさがここでは強調されている。

⑦から⑩では、女性の身の上がはじめて明らかにされる。樓上から外を眺めやる美しい女性は、實はその昔、「倡家の女」であった。今はある男のもとに嫁いだのであるが、その男は家を出たまま歸らない、所謂「蕩子」であった。樓上の女性は、今では夫のいない寢臺でいつも寂しくその歸りを待ち續ける身の上となったのである。

本詩は特に難解な語彙もなく、一見したところ實に平易な詩のように感じられる。しかし、すでに指摘したように、⑦

「昔爲倡家女 今爲蕩子婦」考（矢田）

⑧の二句の解釋をめぐっては、主人公の女性が「倡家女」であつた「昔」を、(一)不幸な時期と捉えるか、それとも(Ⅱ)比較的恵まれた時期と捉えるかによつて、全く相反する二つの説が存在するのである。そこで以下、【一説を取るもの】と【Ⅱ説を取るもの】とをそれぞれ具體的に提示することにする。

#### 【一説を取るもの】

(イ) 昔爲倡家女、閉之總章（往筆者、以下同じ）（總章は樂官の名）、晚嫁復遇蕩子、則是終身不諧也。

（清・何焯『義門讀書記』卷四十七「文選」）

(ロ) 【譯】わたしはもと倡家の歌い女で、さんさん男との離別を悲しんで來たが、今はまた、旅に出たままの男の妻となつていつもひとりぼっち。

【語注】倡家女：遊女のこと。倡家はお茶屋の類。倡家の女は、男との離別の悲しみを味わいがちである。<sup>(1)</sup>

（斯波六郎・花房英樹訳『文選』筑摩書房、

世界文学大系70、一九六三年）

(ハ) 【譯】彼女の前身は色町の女としてさんさんに苦勞を重ね、やっと苦界から身を脱けて縁づいたと思えば、夫は蕩

## 中國詩文論叢 第十五集

子、家を外に旅かせぎに歩く男であつた。

(入谷仙介譯『古詩選』朝日新聞社、一九六六年)

- (二) 她、一个倡家女、好不容易掙脫了歡場泪歌的羈絆、找到了極心的郎君、希望過上正常的人的生活、……

(漢魏六朝詩鑒賞辭典』上海辭書出版社、

馬茂元・趙昌平擔當、一九九二年)

## 【Ⅱ説を取るもの】

- (甲) 「倡家」といい、「蕩子」というのが、漢の社會に於いていかなる存在であつたかは、正確に追跡しにくい問題であるが、倡家とは、古樂府の「相逢行」に、「堂上には樽酒を置き、邯鄲の倡を作使す」というように、はなやかな存在であり、ここに「昔は倡家の女と爲り」というのも、過去には幸福な時間をもつたことへの指示であると、私は感ずる。……

私がこの二句を……幸福な昔と不幸な今との對比として讀むのは、「文選」の詩を検すると、昔……、今……、と、といういい方は、同じ條件の時間の並列であるよりも、異なつた條件の時間の對比である場合の方が、多數であり、且つそのほとんどすべてが、昔日の幸福を、現在の不幸と對比するからである。

(吉川幸次郎著「推移の悲哀―古詩十九首の主題―中」

『中國文學報』第十二冊所收、一九六〇年)

- (ハ) 「譯」 この女、昔は遊女屋の倡女<sup>うたいめ</sup>で、華美<sup>はで</sup>な生活<sup>くらし</sup>をしていたのに、今は放蕩男の妻となっている。

「語注」 倡家女：歌姫、遊女。

(内田泉之助・網祐次譯『文選(詩篇) 下』、

明治書院、新釋漢文大系、一九六四年)

- (ロ) 「倡家女」雖不同于後來的娼妓、但無論如何她總是習慣于繁華熱鬧的歡樂生活。

「語注」 凡是以歌唱爲職業的藝人就叫做「倡」。……

「倡家女」、猶言歌妓。但和後世的娼妓意義不同。

(馬茂元著『古詩十九首初探』陝西人民出版社、一九八一年)

以上の通り、本詩の⑦⑧句の解釋については、全く相反する二つの説が存在すること、そして、このように解釋が大きく分かれる原因は、「倡家女」を(Ⅰ)「男との離別の悲しみを味わいがち」な不幸な境遇と捉えるか、それとも(Ⅱ)華美な生活が可能な比較的恵まれた境遇と捉えるか、という点にあることが確認できるであらう。

また、そのほかに「倡家女」を多情な存在、淫亂な存在と

捉え、女性が化粧をして窓から外を眺めやる描寫に對して、「空聞を守ることが難しく、それゆえ化粧をして他の男を誘おうとしているのだ」と解釋する説も見られる。<sup>(2)</sup>ただし、この説では、「倡家女」がその美貌を武器に男を誘う華美な存在として捉えられていることから、⑦⑧句については、結果的にⅡ説の方向で解釋されることになるであろう。よって、これはⅡ説におけるバリエーションの一つと見てよい。

このように本詩には、先のⅠ・Ⅱ説の異同をはじめ、さまざまな解釋が存在する。<sup>(3)</sup>しかし、いずれにしろそれらの適否を考えるうえでの重要な鍵は、漢代における「倡家女」の實態を明らかにする點にあることは確かであろう。

### 三 漢代における倡家の實態

では、本詩の作られた漢代において、「倡家女」とはいいたいいかなる存在であったのだろうか。この點については、前章の(※)説にも「正確に追跡しにくい問題」とあるように、はなはだ難しい問題ではあるが、先に指摘したように、Ⅰ・Ⅱ説の適否を含め、本詩の解釋を考えるうえで、決して避けて通ることのできない重要な問題である。そこで本章では、漢代またはそれ以前の「倡家」についての記述を調査し、可

能な限りにおいてその實態を明らかにしてみたいと思う。

「倡家女」について、例えば(ロ)説は「さんざん男との離別を悲しんで來た」存在と捉え、(ハ)説は「色町の女としてさんざん苦勞を重ね」る存在と捉えていた。これらの説はいずれも、おそらく妓館で歌舞などにより宴席の相手をする唐代の妓女のイメージをそのまま漢代の「倡家女」に當てはめたものと思われる。

唐代の妓館の妓女は、唐・孫棨著『北里志』の記述によれば、貧しい家から身賣りされた幼女や、不逞の輩に騙され賣り飛ばされた良家の女子などがその擔い手であったらしく、いったんこの道に入ってしまうと、自ら抜け出す術はなかったという。<sup>(4)</sup>こうした點から見れば、唐代の妓館の妓女は、確かに不幸な存在であったと言えよう。もしかりに、漢代の「倡家女」がここで確認された唐代の妓館の妓女と全く同質の存在であったならば、本詩の⑦⑧句の解釋については、(ロ)説や(ハ)説の支持するⅠ説が適していることになる。

ところが一方では、前章(ハ)説のように、漢代の「倡家女」は、後世(おそらく唐代も含むであろう)の娼妓とは異なる側面を持った存在であったとの指摘も見られる。

## 中國詩文論叢 第十五集

では、はたして漢代の「倡家女」は、唐代の妓館の妓女と同質の不幸な存在であつたのであろうか、あるいは、それとは異質の比較的恵まれた側面を持つ存在であつたのだろうか。以下、その點を文獻資料に基づき、明らかにしてゆくことにする。

そもそも「倡家」とは何か。まずはこの點から考察してみたい。『漢書』卷九十三「佞幸傳」に、

(a) 李延年、中山人、身及父母兄弟、皆故倡也。……女弟得幸於上、號李夫人、……延年善歌、爲新變聲。……

とあり、「倡」の字に對して、唐の顏師古は「樂人也。」と注している。李延年は、歌がうまく作曲に優れていたため、音樂好きの前漢の武帝に寵愛された人物であつた。また、後漢の許慎の『說文解字』（八篇上、人部）に「倡、樂也。」とある。以上のことから、「倡」とは、顏師古の言う通り、音樂に關係のある職業に従事する人々を指す言葉であることは確かであらう。

では、彼らはいったいどのような活動をしていたのであ

うか。それは以下の例からも窺えるように、天子諸侯をはじめ權勢の家の宴會で歌舞を披露し、出席者の耳目を娛しませ心を樂しませることを、その職務としていたようである。

(b) 武安（武安侯・田蚡。前漢・景帝の皇后、王太后の同母弟。）曰、「天下幸而安樂無事、蚡得爲肺腑（外戚の意）、所好音樂狗馬田宅、蚡所愛倡優巧匠之屬。」

（『史記』卷一〇七「武安侯傳」）

(c) 去（漢の王族の一人。廣川國の繆王齊の子。）即繆王齊太子也。……後去數置酒、令倡俳贏戲坐中、以爲樂。

（『漢書』卷五十三「景十三王傳」）

(d) 置酒乎顯天之臺、張樂乎膠葛之寓、……俳優侏儒、狄鞮之倡、所以娛耳目而樂心意者、麗靡爛漫於前、靡曼曼色於後。

（前漢・司馬相如「上林賦」、『文選』卷八所收）

(e) 元和三年、肅宗北巡狩、……朝見上壽、引入倡飲甚歡。

（『後漢書』卷十「皇后紀」）

(f) 冀（後漢・順帝の梁皇后之兄）乃大起第舍、而壽（梁冀の妻）亦對街爲宅、彈極土木、互相誇競。……冀壽共乘輦車、……游觀第內、多從倡妓、鳴鍾吹管、酣謳竟路。

(g) 豪人之室、連棟數百、膏田滿野、奴婢千羣、徒附萬計、  
 ……妖童美妾、填乎綺室、倡謳伎樂、列乎深堂。  
 (『後漢書』卷三十四「梁冀傳」)

(h) 盧植字子幹、……少與鄭玄俱事馬融、……融外戚豪家、  
 多列女倡歌舞於前。  
 (『後漢書』卷六十四「盧植傳」)

また、これらの例から氣づくことは、(b)では「倡優」と、  
 (c)では「倡俳」などであるように、「倡」はしばしば「優」  
 や「俳」と並稱されることである。

では「優」と「俳」とは、いったい「倡」とどのような關  
 係があるのであろうか。この點について、唐の顏師古は『急  
 就篇』(漢・史游撰)卷三の「倡優俳咲觀倚庭」に注して、  
 「倡、樂人也。優、戲人也。俳、謂優之褻狎者也。咲、謂動  
 作云爲皆可咲也。」と、それぞれに異なる定義付けをしてい  
 る。顏師古の定義付けは、おそらくそれぞれの漢字の字義に  
 即してのものであろう。しかし、『太平御覽』卷五六九「樂  
 部七・優倡」に引く『漢官典職』には、

「昔爲倡家女 今爲蕩子婦」考(矢田)

(i) 天子幸德陽殿、作九賓樂、……以二丈絲繫兩柱中頭開  
 相去數丈、兩倡女對舞、行於繩上。又踣局屈身、藏形斗  
 中、……

とあるように、二人の倡女が綱渡りや身を屈して斗(ます)  
 の中に身を隠すなどの藝當を行なっていることから、あるい  
 は、清の段玉裁が『說文解字』(八篇上・人部)の「俳」の  
 項で、「以其戲言之、謂之俳。以其音樂言之、謂之倡、亦謂  
 之優。其實一物也。」と注しているように、「倡」「俳」「優」  
 の三つは、職種のうえで嚴密な區別はなかったか、あるいは  
 大いに重なる部分があったのかもしれない。

さらに、ここで注目すべきは、(a)の記述の中で「身及び父  
 母兄弟、皆な故と倡なり。」とある點、つまり、李延年の家族  
 全員が「倡」という職業に従事していたという點である。

そもそも、李延年の出身地である中山(現在の河北省定縣  
 を中心とする一帯)は、地が瘦せていて人口が多く、その民  
 俗はせちがらく、するがしこい手段で得た利益で生活をして  
 おり、また、人に媚び入ることに巧みで、「倡優」となる者  
 が多く、女性には瑟を演奏し、舞踏用の履物をはき、富貴の家  
 に出かけては媚びを賣り、諸侯の後宮にあまねく入りこむと

いった有様であつた、という。

(i) 中山地薄人衆、猶有沙丘紆淫地餘民、民俗慣急、仰利而食。丈夫相聚游戲、悲歌忼慨、起則相隨椎剽、休則掘冢作巧姦治、多美物、爲倡優。女子則鼓鳴瑟、跕屣、游媚貴富、入後宮、徧諸侯。

〔史記〕卷一二九「貨殖列傳」

よつて、(a)と(i)の記述を合わせて考えるならば、漢代の「倡」とは、自ら積極的に天子諸侯や權勢の家に取り入り、その宴會の場などで歌舞や藝當を披露することによつて、生計をたてていた職能的藝人集團であつたこと、そしてその集團は、おそらく家族を中心に構成されていたであらうこと、などが推測されるであらう。

もしそうだとすれば、漢代の「倡家」とは、「倡」と呼ばれる職業に従事する家系の意と、そして「倡家女」とは、そのような家系に生まれた女性の意と、それぞれ解釋されるのではないだろうか。事實、李延年には、後に前漢の武帝の夫人となつた妹（李夫人）がおり、彼女もまたものは「倡」であつた。つまり、漢代の「倡家女」とは、李夫人のような出

自の女性を指すのではないかと考えられるのである。

以上、日本で刊行されている注釋書の多くは、「倡家」を遊女屋、お茶屋の類の場所とし、「倡家女」をそのような場所所で歌舞音曲などにより人を楽しませる遊女のような存在と解釋していたが、むしろ、漢代の「倡家」とは、自ら天子諸侯の宮殿や權勢の家に出自いては、その宴席において歌舞や藝當を披露して生計をたてていた、しかも家族を中心に構成されていた職能的藝人集團、言わば旅藝人一家のような存在であつたと見るのが、より實態に近いのではないかと考えられるのである。少なくとも、漢代の「倡家女」のなかには、元來そのような家系に生まれつき、そのままその職業に従事している者が存在していた點、「倡家女」が唐代の妓館の妓女と異なる側面を持っていたことは確かであらう。

#### 四 漢代の「倡家女」の境遇

漢代の「倡家女」が、唐代の妓館の妓女とは異質のものであることは、その境遇の違いからも、確認できるであらう。

唐代の妓館の妓女は、すでに確認した通り、貧しい家の娘で身賣りされた者や不逞の輩に騙されて賣り飛ばされた良家の女子などが、その擔い手であり、その點では極めて不幸な



境遇であつた。

しかし漢代の「倡家女」には、先の(j)や以下の(k)の記述からも窺えるように、自ら富貴を求め、天子諸侯の宮殿や權勢の家に出自いては、媚を賣り取り入ろうとする、積極的かつ主體的な側面が認められ、その點は明らかに唐代の妓女のようないない受け身の存在とは異なるであらう。

(k) 今夫趙女鄭姬、設形容、揳鳴琴、揄長袂、躡利屣、目挑心招、出不遠千里、不擇老少者、奔富厚也。

〔史記〕卷二十九「貨殖列傳」

また、漢代またはそれ以前の「倡家女」のなかには、天子や王をはじめ有力者の寵愛を受け、さらにはその妻妾に拔擢された者もいた。

(l) 趙王遷、其母倡也、嬖於悼襄王。悼襄王廢適子嘉而立遷。

〔史記〕卷四十三「趙世家」

(m) 孝武李夫人(李延年の妹)、本以倡進。

〔漢書〕卷九十七「外戚傳」

「昔爲倡家女 今爲蕩子婦」考(矢田)

(n) 及李夫人卒、則有尹婕妤之屬、更有寵。然皆以倡見、非王侯有士之士女、不可以配人主也。

〔史記〕卷四十九「外戚世家」

(o) 武宣下皇后、瑯邪開陽人。文帝母也。本倡家、年二十太祖(曹操)於譙納后爲妾。

〔三國志〕卷五「魏書・后妃傳」

戰國時代、趙の悼襄王に寵愛され、自分の生んだ遷を後繼ぎにさせた女性(l)、前漢の武帝に寵愛され夫人に拔擢された李夫人(m)、夫人となるまでには至らなかったが、同じく前漢の武帝の寵愛を受けた尹婕妤(n)、そして後漢の靈帝の頃、曹操の寵愛を受け、妾(後に正妻となる)となった卞夫人(o)は、いずれも「倡家」の出身であった。

これらの記述より、漢代の「倡家女」は、その一つの側面として、爲政者や權力者の妻妾にまで登りつめるだけの可能性をも秘めた存在であったことが確認できるであらう。

以上、漢代の「倡家女」について、その美貌と藝當を武器に、自ら天子諸侯の宮殿や權勢の家に出自いては、媚を賣り取り入ろうとする積極的かつ主體的側面と、爲政者や權力者の寵愛を受け、さらにはその妻妾にまで登りつめる可能性を

も秘めた存在であったという側面とが確認された。

もちろん漢代の「倡家女」のなかには、文獻上に現われない不幸な境遇の者も数多くいたことであろう。しかし、少なくともいったん妓館に身賣りされると、そこから抜け出す術のなかった唐代の妓女に比べると、漢代の「倡家女」は、以上に確認した二つの側面を備えていた分だけ、恵まれた境遇にあったと言えよう。

## 五 漢代における「倡家」の身分

漢代の「倡家女」が後世の倡妓とは異質の存在であったという点については、實はすでに民國の盧弼も指摘している。

彼は『三國志集解』卷五「魏書・卞后」における「本倡家」の箇所注して、漢代の「倡家」は後世の倡妓のような卑賤な職業ではなかったと言う。

(p) 弼按……所謂倡樂不似後世之淫業賤流。……卞后一生

行事、傳無貶詞。……又按、「夏侯惇傳」賜伎樂名倡、

比於魏絳受金石之樂、其非卑賤可知。

盧弼は、「倡家」出身の卞夫人が才知徳行の優れた女性で

あったこと、また、曹操が夏侯惇の功績を讃え、彼に伎樂と名倡とを賜與するにあたり、その一件を春秋時代の晋の魏絳が戎との和睦を成功させた功績で金石の樂を賜った故事になぞらえたことなどを根據に、當時の倡家が卑賤な身分ではないことは明らかだというのである。

この盧弼の見解に對して、漢代の「倡家女」が唐代の倡妓とは異質の存在であったという点については、前章までに確認した通り、明確な事實と言つてよい。しかし、漢代の「倡家」が卑賤な職業ではなかったという点については、はなはだ疑問である。なぜならば、「倡家」が漢代においてすでに卑賤な身分と見做されていたことは、以下に挙げる(q)の記述で、「倡優」が「賈婦(商人の妻)」や「產子(奴僕の生んだ子)」と同列に扱われていることから明らかだからである。

(q) 古者以天下奉一帝一后而節適、今貴人大賈屋壁得爲帝

服、賈婦倡優下賤產子得爲后飾。

(前漢・賈誼『新書』卷三「孽產子」)

また、先の(j)の「游媚貴富……」や(k)の「設形容、……目挑心招、出不遠千里、不擇老少者、奔富厚也。」などの記述

からは、見境なく富に群がる漢代の「倡家女」たちの姿が彷彿とされよう。これらの記述からは、漢代の「倡家女」が、節操のない淫亂な側面を備えていたことが確認されよう。

さらに「倡家」は、天子諸侯をはじめ權勢の家に取り入っては媚を賣るという性質上、漢代以前においてすでに爲政者や當路者を奢侈に導き政治を怠らせる弊害要因の一つと見做されていた。例えば、春秋時代・齊の桓公が、先君・襄公の奢侈により衰退した國政をどのように建て直せばよいかと、管仲に質問した言葉の中に、

(r) 昔先君襄公、高臺廣池、湛樂飲酒、……不聽國政、……倡優侏儒在前、而賢大夫在後。是以國家不日益、不月長。……

『管子』卷八「小匡」

とあり、また、秦の始皇帝の奢侈を諫めた侯生の言葉にも、以下のようにある。

(s) 今陛下奢侈失本、淫佚趨末。宮室臺閣、連屬增累、珠玉重寶、積襲成山、……婦女倡優、數巨萬人、鍾鼓之樂

「昔爲倡家女 今爲蕩子婦」考（矢田）

流漫無窮、……

（前漢・劉向『說苑』卷二十「反質篇」）

「倡家」などの藝人が爲政者や當路者の周りを取り巻くことによつて、賢大夫が後方に追いやられるといった現象は、おそらく漢代においても見られたことであろう。とすれば、このような「倡家」などの藝人集團は、志のある憂國忠義の士大夫にとっては、はなはだ蔑むべき目障りな存在として意識されていたことであろう。

以上、文獻資料に即して調査した限りでは、「倡家」はやはり卑賤な身分であつたと結論せざるを得ないであろう。しかし、天子諸侯をはじめ權勢の家での宴席という華美な世界での活動が可能であつたことや、人の耳目を娛しませ心を樂しませる職業柄、天子諸侯をはじめ權力者の寵愛を受けやすかつたであろうことなどを考えたならば、卑賤の身分であつたとはいえ、彼らの自意識としては、それほど不本意なものではなかつたと考えられよう。

## 六 結語

以下、漢代の「倡家」について確認できた點をもう一度整

理したうえで、上記の二説の適否について、筆者の判断を示し、結論をしたい。

### 〔漢代の「倡家」について〕

① 漢代の「倡」とは、自ら天子諸侯の宮殿や權勢の家に出自いては、その宴席において歌舞や藝當を披露することによって生計をたてていた職能的藝人集團を指す。

② そして、その集團は家族を中心に構成されていたと推測される。したがって、「倡家」とは「倡」と呼ばれる職業に従事する家系の意と、「倡家女」とは元來そのような家系に生まれつき、その家業を受け継いだ女子の意と、それぞれ解釋すべきではないかと考えられる。

③ 唐代の妓館の妓女は、身賣りされた貧しい家の娘や不逞の輩に騙され賣り飛ばされた良家の女子がその擔い手であり、極めて不幸な存在であった。一方、漢代の「倡家女」には、その美貌と藝當を武器に、富貴を求めるため、自ら積極的に天子諸侯の宮殿や權勢の家に出自いては、媚を賣り取り入ろうとする強かで淫亂な側面が見られた。

④ また、漢代の「倡家女」のなかには、前漢の武帝の李夫人や後漢末に曹操の妾となった卞夫人のように、權力者の

妻妾になった者がいた。これより、漢代の「倡家女」は、その一つの側面として、爲政者や權力者の妻妾にまで登りつめる可能性をも秘めた存在であったことが確認される。<sup>(7)</sup>  
⑤ よって、漢代の「倡家女」は、唐代の妓館の妓女に比べれば、比較的恵まれた存在であったと考えられる。少なくとも、それを唐代の妓館の妓女と同様の不幸なイメージでのみ捉えるのは、適切ではないと判断される。

⑥ 「倡家」は、天子諸侯や權勢の家に取り入っては媚を賣るという性質上、爲政者や當路者を奢侈に導き政治を怠らせる淫亂卑賤の存在と見做されていた。しかし、天子諸侯の宮殿や權勢の家での宴席という華美な世界での活動が可能であったことや、歌舞や藝當により人の耳目を娛しませ心を樂しませる存在であったことから、天子諸侯をはじめ權力者の寵愛を受けやすかったであろうことなどを考えると、漢代の「倡家」という境遇は、やはり必ずしも本人にとって不本意なものではなかったと判断される。

### 〔二説の適否について〕

以上の通り確認できた漢代の「倡家」の實態を踏まえた限りにおいては、「昔爲倡家女、今爲蕩子婦」の二句について

は、Ⅱ説「昔は倡家の女という比較的恵まれた境遇にあったが、今では蕩子の婦という不幸な境遇にある」という方向で解釋した方が穩當であると判斷できるであろう。

ただし、Ⅱ説を支持するものは、おおよそ「倡家女」を華美な存在、あるいは歡樂的な生活に慣れた存在と捉えていたにすぎなかった。

それに對して、筆者はむしろ、漢代の「倡家女」は、天子や有力者の妻妾にまで登りつめる可能性をも秘めた存在、換言すれば、戀の相手に不自由せず、幸福な結婚生活までが期待できる存在であつたとの觀點から、この二句を解釋すべきではないかと考える。なぜならば、本詩を虚心に見た場合、その悲哀の原因は、現に「蕩子の婦」となっていること、すなわち現實の不本意な結婚生活にあることは明白であり、とすれば、このような觀點から解釋した方が、この二句を「幸福な結婚生活をも期待できた昔」と「不本意な結婚生活を強いられる今」といった具合に、結婚生活という共通項で對比的に捉えることが可能となるからである。そして、このように「倡家女」を積極的な戀の追求者として捉えてこそ、「蕩子婦」となってしまった女性の不本意な現實がより強調され、その悲劇性がより深まるものと考えられるのである<sup>(9)</sup>。

「昔爲倡家女 今爲蕩子婦」考（矢田）

〔注〕

(1) このあと續けて、梁の陰鏗の「月夜聞中」詩の「誰能當此夕、獨處類倡家」という句を根據に、「この倡家の女も、

男なしの獨り居のくらしをしがちだ、という意味がこめられているのかも知れない。」と述べられている。しかし、陰鏗の詩はむしろ本詩における「倡家女」のイメージを基に作られたものであり、「獨處類倡家」の句は、「獨りでいる様子が、本詩に詠われていたあの倡家の女のようなものである。」と解釋すべきところである。したがって、陰鏗の詩に描かれている「倡家」のイメージでもって、本詩の「倡家女」のイメージの根據とするのは、本末轉倒していると言えよう。

(2)

岡田正之・佐久節註『文選・中』（國譯漢文大成、東洋文化協會、一九五六年）に、「此女はもと遊女にして今は遊冶郎の妻たるも、夫は遠行して歸らざるを以て獨り空閨を守る能はず。故に治容をなして人を誘はんとするなり。」とあり、本稿の二章で（イ）説として挙げた著書の「餘説」に、「初めの六句、重言の熟語を連用して、……。そこに浮き出された女の姿、その女のいだく無限の怨愁を繪を見るように描いて、暗に空閨守り難く、容（かたち）つくつて人を誘わうとする女の意を寓した。」とある。

(3)

漢代の「思婦」を主題とした詩に對しては、傳統的に君臣關係の寓意の方向での解釋が行なわれている。本詩に對しても、例えば「此喻人有盛才事於暗主。故以婦人事夫之事、託

## 中國詩文論叢 第十五集

言之。」(『文選』卷二十九、張銑注)といった解釋が見られる。張銑の説では、「倡家女」を才能ある人物の比喩と捉えている。つまり、「昔」を將來に期待を持てた時期と捉えていることから、寓意の適否はともかくとして、張銑は『説の方向で本詩を解釋していたと判斷できるであろう。

- (4) 『北里志』「海論三曲中事」の項に、「諸女自幼丐育、或傭其下里貧家。常有不調之徒、潛爲漁獵。亦有良家子、爲其家聘之、以轉求厚賂。誤陷其中、則無以自脫。」とある。なお、『北里志』については、齋藤茂譯注『教坊記・北里志』(平凡社、東洋文庫、一九九二年)に詳しい。

- (5) 例えば、李夫人が前漢の武帝に寵愛されるようになった要因について、松岡榮志論文「李延年と樂府」(『學藝國語國文學』第十九號、一九八四年)には、本稿に資料として挙げた(a)と(i)の記述などを基に、「その必然としての面」が指摘されている。このように「倡家」出身の女が、權力者の妻妾にまでなった背景には、積極的に天子諸侯や權勢の家に取り入ろうとする彼女たちの行動力といった必然的要因が、一面においては、存在していたと考えられよう。

- (6) 『三國志』卷九「魏書・夏侯惇傳」に、「賜伎樂名倡、令曰、魏絳以和戎之功、猶受金石之樂、況將軍乎。」とある。

- (7) 武舟著『中國妓女生活史』(湖南文藝出版社、一九九三年、五一頁)では、當時の妓女は、高級・一般・低級の三つの等級に分類でき、女樂・倡優などの大多數の者は高級妓女に屬

するとし、さらに、彼女たちはいったん皇帝や貴族の賞識を獲得したならば、一舉に名を成す可能性を秘めていたという。また、宮崎市定論文「東風西雅錄 倡優」(『宮崎市定全集』20、岩波書店、一九九二年)にも、「彼等の身分はもとより自由を失った奴隸に過ぎないが、但し古代社會の奴隸は中世の身分社會における奴隸とは異なり、いったん解放されれば再び一人前の自由人となり、高い地位を享受することも不可能ではなかった。」とある。

- (8) 注(7)掲載書(六八頁)には、有力者の妻妾となり貴族になることが、大多數の妓女の最高の理想であり、追求であり、目標であった、と指摘されている。

- (9) 一方、漢代の「倡家女」には、富貴を求めるためには、千里を遠しとせず、老少を擇ばずといった淫亂な側面も認められた。また、「倡家」は爲政者や當路者を奢侈に導き政治を怠らせる弊害要因の一つとして、忠君の人士から目障りな存在として意識されていた。本詩の作者については、未詳であるが、かりにそれが懷才不遇の士であったとすれば、「倡家女」を富と權力に群がる節操のない淫亂な存在と捉え、それへの批判の意を込めて創作した可能性も大いに考えられるであろう。そして、もしそうだとすれば、注(2)で示した説もまた、有力な説として浮上してくるであろう。